

## 鑑賞授業における音楽理解を導く読譜の役割とその効果

～ 主体的音楽活動に向けての読譜の効用とは ～

山崎 正

要旨：

小・中学校における鑑賞授業は、専ら生徒たちが曲を鑑賞する上で興味や関心を持って聴くことができるように、曲そのものへ深く立ち入るような授業より、作曲家や楽器、編成や音楽の背景にあるものを使って学習計画されるものが多い。

そのため、生徒たちが普段聴き慣れない音楽情報を繰り返し聴いて、その内容が人間感情とどのように結びついていくかという観点での鑑賞はおざなりとなっている場合もあるのが現状だ。しかし、本来音楽を鑑賞するという主体的な行為は、本人の中に内在する音楽に対する欲求が満たされなければならないと考える。本論文は、肉体的条件である「耳の働き」による鑑賞という行為との関係を考え、その特性を生かしながら資格的な楽譜を読み取る作業に触れることで、鑑賞をより感覚的にも造形的にも深めるのではないかという観点に立って述べようとしたものである。しかし、データの蓄積がまだ不十分であることから今後の継続研究の第一歩であることを記す。

キーワード：①音楽教育 ②学習指導要領 ③演奏論 ④楽曲分析 ⑤音楽史

### 1. はじめに

義務教育（小・中学校）における音楽科教育の中での鑑賞授業の役割は、日本の伝統芸能に触れることによって自国の文化を理解し、諸民族の音楽に触れることによって、異文化理解を促進するだけでなく、西洋音楽を通して音楽の持つ心理的影響や音楽構造の成り立ち、歴史的背景を理解し、より深く音楽を楽しむ心情を育むために行うところに目標が置かれている。

しかし、実際の教育現場において、児童や生徒たちは普段聴き慣れていないクラシック音楽にすぐに馴染むことができているのだろうか。また、この疑問は、義務教育の場における就学年齢が高くなるにつれて高くなる傾向にあるのは何故だろうか。

本文ではその理由がなんであるかを考察し、それを打開する手法について提言していきたい。

### 2. 耳の機能と特性

#### 2-1 乳児期から幼児期までの音楽との関わり

耳と音との関わりは胎児期6ヶ月頃から始まる。誕生までの期間は音や音楽を受動的に受け取るしかない中で、母親や父親の声の識別やよく流れてくる音楽を記憶していると言われている。また、胎内記憶については1989年に発表された文部省科学研究費補助金研究

成果報告書<sup>注1</sup>に報告されており、「胎児の記憶と学習の可能性に関する研究」の中で、妊婦さんに聞かせていた音を生まれた後の子供が覚えているかという実験を行い、記憶として残っていることが実証されている。

また、「池川明の胎内記憶 2011年3月号」（トランタンネットワーク新聞社 <http://www.30ans.com/>引用）では、『ハミルトン交響楽団の指揮者であったポリス・ブロット氏は、体験談として「譜面をめくらずとも次のチェロの旋律が頭に流れてくる。」という体験をしばしばしており、チェリストであった母親が、彼がお腹の中にいた頃に聞いていた曲だったことがわかったと報告している。』

このような体内記憶は受動的に「刷り込み」による認知された音や音楽であるが、誕生後の乳児にとっては受動的であっても選択権が生まれてくる。それは泣くという行為での拒否ができるようになったということである。<sup>注2</sup>

さらに自立歩行ができるようになった幼児期においては、テレビから聞こえてくる幼児番組の音楽への自発的反応や、おもちゃで得られる音の選択権も与えられ、能動的に音や音楽に接することができるようになってくるのである。

能動的に音や音楽を選ぶという行為には、習慣性や周期的反復行為が大きく関わっている。前項でも述べたように、経験したことの無い音や音楽に関しては、「無関心反応」や「拒否反応」を示すことが多いことがわかっているのだが、自ら積極的に音や音楽を選択していく行為は「好意的反応」であり、経験値に類似した要素が含まれているか、同系列に分類できる音や音楽があるからである。

## 2-2 幼少期の模倣（模唱）による音楽との関わり

幼少期における音や音楽との関わりは、興味の対象となる音や音楽を能動的に「真似をする」行為によって達成させていく。それは自分と同じ年代もしくは高年齢の者の行動に目が向けられることが多く、年下との関係性より 5:1 の割合で多いと言われている。その行動は、興味の対象となる事柄を部分的に「繰り返す」ことや、対象となる人物に「フィードバック反応」を求め、その反応を観ることで「模倣」が促進され、時としてヴァリエーションへと発展するケースも見受けられる。

それは、何も音楽に限ったことではない。言語活動による言葉の発達はまさしく「模倣」から始まり、相手の反応を手応えとして発達していくのである。

このように、教育の原点とも言える「模倣行為」は、音楽だけに限定してみると印象深い部分に集中する。例えば、子どもの歌にある俗にいう「サビ」の部分は、子どもにとって印象的なメロディーの高低差と比較的歌いやすい大まかなリズムで構成されているため、子どもの行動の中で、「印象的な部分だけを繰り返す。」という行為を取ることがしばしばある。このような場合、「模倣行為」を始めた当初は音楽を全体の記憶として捉えられているわけではない。興味を一点化して捉えていることにより、一点化した音楽の先の続きや、その部分より前のフレーズも思い出されているわけでもない。それが次第に全体像として把

注1 「胎児の記憶と学習の可能性に関する研究」 児玉典子著 文部省科学研究費補助金研究成果報告書（1988年 科研費課題番号 63510054）

注2 「胎内記憶-命の期限にトラウマが潜んでいる」 池川明著 角川SSC新書（2008年7月）

握できるようになっていくと、冒頭のイメージや、サビの後に続く間奏やエンディングに至るまで記憶が広がっていく。

演奏に合わせて聴く場合、聴きなれた曲であれば先を予測して歌うことができるようになる。そして、断片的な記憶を1曲に仕上げていくためには、最初からの繰り返しによって記憶の拡大を行っていくことを必要とする子供も少なくない。

幼児期のピアノ教育において、どうしても部分練習を嫌い、常に最初から演奏してしまう子どもが出てきてしまうのはこのためだと考えることができる。

### 3. 模倣（模唱、模奏）の弊害と読譜の意味

「模倣」や「フィードバック反応」は、「繰り返し」の反復を行うことや記憶の「刷り込み」と意味を理解していく上で、教育の初期段階では大切な方法である。（文部科学省：「幼児期運動指針」幼児期運動指針策定委員会）平成24年3月）

しかし、この方法は動物が餌を得るための反復理解によって目的を果たすのと同じであって、動物的な行動に他ならない。間違いを間違いと認め、修正するにはあまりにも時間を要する行為である。

そこで、音楽の導入ではしばしば動物の絵や図形や言葉を利用し、構造が容易に見えるようにして音楽の流れを示す方法が用いられる。この方法は、特にピアノ幼児教育の導入書の中に顕著に見て取ることができる。また、小学校の低学年を対象とした音楽の教科書にもこの方法が多く活用されている。

この絵や図形や言葉による音楽の流れを表していたものが、音符によって構築表現しようとしたものが楽譜であることから、楽譜を読む行為、即ち読譜することは、音楽構造を理解する上で最も大切な「道しるべ」であるということがわかる。

### 4. 能動的鑑賞の必要性と情報の整理

鑑賞という行為においてもまた、生まれ持った耳の特性によって「無関心反応」や「拒否反応」という同様な反応が起こる。鑑賞授業で取り扱われる教材のように、普段聴き慣れない音楽との出会いは、「無関心反応」や「拒否反応」を起こす最も適した環境であると言えるだろう。

そのため、聴き手である子どもたちが欲しくもない作曲家の情報や、無理矢理子どもたちが興味を持てるようにと、曲を取り巻く周辺情報が詰め込まれる。

本来、最も子どもたちに聴いてもらいたいのは楽曲であるはず。そこから出発して、表現に関わる手段や鑑賞を楽しむ観点を探し、自ら再現された音楽に対する親しみを感じるための方法を主体的に発見していくというものであれば、そこから派生する「なぜ？」や「どうして？」、「どうなっているの？」が、「そうか！」、「わかった！」、「こういうことだったのか！」につながり、新たな興味へと発展していく。

それでは、学校教育現場における音楽教育の中での鑑賞の授業はどのように行われているのが一般的であるかを検証してみよう。勿論、ここに取り上げる指導案は単なる筆者の一例であって、しかも成功例や失敗例を持ってきているのではない。また、これには一応言語活動や、アクティブラーニングといった今日的課題を盛り込んだものになっている。また、新

学習指導要領でも強化されている学習の評価や情報機器や視聴覚教材の活用に対しても意識している。

違いは、原譜を読譜しながら鑑賞し、そこから得られる曲の情報について疑問を解決したり、作曲家が表現しようとした本質を感じとったりする部分が省略されているだけである。

取り上げる教材は、中学校 1 学年の鑑賞教材であるシューベルト作曲：歌曲「魔王」である。ここでは次のような指導目標及び指導計画の一例が想定される。

この教材は、①歌曲（歌とピアノ）、②ドイツ語の詩（ゲーテ作）、③詩の内容（登場人物 3 人と語りによる物語の進行）、④表現の違いによる複数の作品の評価（同詩による複数の作曲家による）⑤伴奏の役割と工夫（内容の再現）というような観点が直ぐに想定できる。更にアクティブラーニングの要素を取り入れた能動的な鑑賞を授業案としてみることにする。

#### 【例 1】（指導目標&指導計画）

##### 第 1 学年 音楽科学習指導案

1 題材名 「詩の内容を理解し、曲の表現の美しさを感じ取ろう」

2 題材設定理由

(1) 生徒観

中学 1 年生としての新生活が始まって直ぐ、まだまだ生徒たちの中にコミュニケーションが活発とは言えないし、遠慮がちにも見受けられる。音楽は好きだが、授業で扱う楽曲には容易に入っていけない部分もあるが、グループ活動等によって積極的な面も見せはじめている。ここで鑑賞教材を能動的に扱うことで、生徒間の協働学習の楽しさを通してコミュニケーションが活発になることを期待する。

(2) 教材観

「魔王」はゲーテ作「魔王」の詩による歌曲である。詩には父と子と魔王、そして語り手の 4 人が描かれているが、これを一人の歌手が歌い分ける登場人物の声を、音域の変化や音色や強弱変化表現法や、嵐の中を駆け抜ける馬の様子等の場面の背景を担うピアノ伴奏による音楽表現、ドイツ語の言語による言葉の美しさ、同詩による複数の作品の聴き比べ等による様々な音楽の諸要素を感じ取ることができる教材である。

生徒にとって鑑賞という受動的な授業も、この様々な鑑賞の観点を使って能動的に行うことができる可能性を持った教材であり、主体的な活動が行えるものである。

(3) 指導観

本題材では、詩の内容と音楽を構成している要素の働きを理解し、その結びつきを実際に体験することによって表現の美しさや楽しさを感じ取ることができる

ことを目標とする。まず鑑賞によって声による人物の表現の違いや、伴奏の効果による情景描写、場面の変化に気づき、実際に自分自身で詩に表現されている人物の役割についての表現を試みる。アクティブラーニングの観点からお互いの考えを自分の言葉で発言し合い、理解を深めていくとともに、違いを認め合いながら鑑賞の仕方を学んでいく。また、二人の演奏者のビデオを見ることによって、表情や表現の違いに触れ、演奏者の解釈の違いによる音楽表現の柔軟な捉え方があることを理解し、今後の日常的かつ継続的な鑑賞への態度と活動へつなげていく。

### 3 言語活動との関連

本授業では、鑑賞を通じて感じ取ったことを自らの言葉で人に伝える場面と、実際に詩の中に登場する人物を役割分担して演ずる（朗読）ことで、言葉として発することで感じる心情を理解し、登場人物の心理的变化に気づいていくように考えている。このプロセスの部分が、本授業の重要な言語活動と位置づけている。

### 4 題材と学習指導要領との関わり(学習指導要領[平成 29 年 3 月告示])

[B 鑑賞] (1) ア、イ

[第 3 指導計画の作成と内容の取り扱い] (8) ア、イ及び (9)

### 5 題材の目標

- ① 詩の内容が体験活動を通して理解できるとともに、登場人物の心情を感じ取ることができる。
- ② 情景描写を感じ取るとともに、場面の変化が理解できる。
- ③ 登場人物における音楽的要素の違いと効果を感じ取ることができる。
- ④ 演奏者の違いによる音楽的表現の違いを感じ取ることができる。

### 6 題材の評価基準及び学習活動における評価基準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受と表現の工夫	ウ 鑑賞の能力
題材の評価基準	○場面ごとの歌唱表現の違いを感じ取るろうとする。 ○伴奏の役割や表現の変化を言葉で表現しようとする。 ○演奏者の違いによる表現の違いを感じ取ろうとする。	○場面ごとの人物の表現の違いを言葉で表現できる。 ○伴奏の役割や表現の変化を言葉で表現することが出来る。 ○演奏者の表現の違いを言葉で表現することが出来る。	○詩の内容や登場人物表現の違いを聴き取ることが出来る。 ○伴奏の変化や心理的变化の様子を聴き取ることが出来る。 ○演奏による表現の違いを聴き分けることが出来る。

鑑賞授業における音楽理解を導く読譜の役割とその効果～ 主体的音楽活動に向けての読譜の効用とは ～

<p>学習活動における評価基準</p>	<p>① 場面を想像しながら聴こうとする。 ② 人物の歌唱表現の違いを聴こうとしている。 ③ 伴奏の場面変化や役割の変化を聴こうとしている。 ④ 演奏者の違いによる表現の違いを注意して聴こうとしている。</p>	<p>① 登場人物の表現の違いを感じながら、場面の移り変わりを文章や言葉で表現できる。 ② 伴奏による場面の変化を感じ、言葉で表現できる。 ③ 演奏者の表現の違いを言葉で表現できる。</p>	<p>① 詩に表現されている人物の心情を、感じながら聞くことができる。 ② 伴奏の変化が人物の心情や様子をどのように表現しているか聴き取ることができる。 ③ 演奏者の表現がどのように違うかを聞くことができる。</p>
---------------------	---	---	--

7 題材の指導及び評価計画

時	主な学習活動・学習内容	○教師の働きかけ（☆評価基準）
<p>一時限</p>	<p>(1) 詩の鑑賞をしよう ・魔王はどんなイメージ？ ・何人登場した？ ・各人物はどんな気持ち？ ・物語はどんな内容？</p> <p>(2) 曲の鑑賞をしよう ・この曲の演奏形態は？ ・伴奏楽器の役割は？ ・各人物はどんな違い？ ・声の工夫は？</p>	<p>○教師の働きかけ（☆評価基準）</p> <p>○詩を情感を込めて朗読しよう。 ○各人物のセリフを役割を決めて読もう。 ○物語の内容と人物の心情を考えよう。 (☆アー①②、ウー①)</p> <p>○歌とピアノによる音楽の表現の良さと工夫を感じ取ろう。 ○言語の表現と伴奏の表現について発表しよう。 ○人物の表現の違いを話し合おう。 (☆アー③、イー①②)</p>

二 時 限	<p>(1) 曲を鑑賞しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 場面の移り変わりは？</li> <li>・ その時の心情の変化は？</li> </ul> <p>(2) 違う演奏を聴こう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 声の表現の違いは？</li> <li>・ 伴奏表現の違いは？</li> </ul>	<p>○ 場面の移り変わりを想像しながらその変化の様子を文章に表現してみよう。</p> <p>○ 各場面の伴奏効果を考え、心情の変化を話し合い、発表しよう。</p> <p>(☆ア－③、イー②、ウ－②)</p> <p>○ 演奏の違いによる声の違いについて考えよう。</p> <p>○ 演奏の血がによる伴奏表現の違いについて感じ取って、感想をまとめよう。</p> <p>(☆ア－④、イー③、ウ－③)</p>
8 本時の学習活動		
学習活動・学習内容	○教師の働きかけ ☆評価基準 ▲言語活動	
(以下、省略)	(以下、省略)	

上記のような指導案は楽曲を作曲家の目で深めたというよりは、各々が詩や音楽から読み取れる情報によって、個人の感性と融合させていき、話し合いによって様々な考えを認めつつ、楽曲に対する教養を深めていくというものである。

(3)の指導感に述べられている『まず鑑賞によって声による人物の表現の違いや、伴奏の効果による情景描写、場面の変化に気づき、実際に自分自身で詩に表現されている人物の役割について表現を試みるとともに、(後略)』でイメージ譜や楽曲の原譜を見ながら鑑賞できれば、音楽の密度や緊迫感を楽譜から体験でき、さらに立体的な解釈の効果が得られるのではないだろうか。本来得るべき、音楽の本質を詩という別の芸術との関係の中でどのように融合させているのかというような観点からも展開していくことが創造的な鑑賞と言えるのではないか。

## 5. 鑑賞授業への読譜導入の必要性とその効果

2項でも述べたとおり、「繰り返し」の反復は、鑑賞においても大切なことである。1,2回聴いただけでは、音楽を心にしっかりと刻み込むことはできない。

小学校や中学校の教科書においては、音楽をイメージ化するために「図形譜」を用いた表現方法がとられている。

例えば、ベートーヴェン作曲：交響曲第5番の第1楽章の冒頭の動機を、図形譜で表現するとしたら次のような図形で表記することができるであろう。



教科書を作成する各社は、鑑賞教材をより学習者がとらえやすくするために様々な図形イメージを凝らして表現している。それは形だけでなく色彩による工夫もされている。色の音のクールさや、ピンクによる温かさまで表現しようとするものもあるが、一つの楽曲の中で音型や強弱表現で色分けされて使用しているものはなく、太さ細さでの強弱表現となっている。なぜこの色なのかや音高による増減に至る表現など、まだまだ使用目的が明確であるとは言えないのが現状である。(中学生の音楽 教育芸術社 平成 28 年度版及び中学音楽 音楽のおくりもの 教育出版 平成 28 年度用参照。)

しかし、元々楽譜は何も特殊な造形物ではなく、音の高さや強さ、長さ等を図形譜の延長上の意味合いで使われはじめたと言える。文字譜、タブラチュア譜、ネウマ譜、定量記譜法等、様々な経緯はあるものの、次第に作曲家の意図する情報をなるべく多く伝えることができるように改良されて、今日のような姿に完成されてきたものである。確かに、いろいろな約束事が楽譜には詰まっており、複雑すぎるかもしれない。しかし、単に平面図形の中に密度や縦横の広がり表現しているというような絵画的な見方をすれば、イメージ譜となんら変わらないのではないだろうか。

先ほどの交響曲第 5 番の図形をピアノ譜で表すと次のようになる。

**Allegro con brio**



イメージ譜よりは複雑に見えるかもしれないが、縦の幅は力強く、横への動きは時折停止するように見えることから同じ効果を得ることができるだけでなく、より立体的な造形として捉えることができるのである。

『楽譜が出ていれば、音を読まなければならないのだ!』という固定観念を持つことによって、楽譜は恐ろしく難しいものと見えてくるが、単なる音のイメージとして捉え、音の変化を上下の高さとしてみたり、横の方向には時間の中に含まれる音の数による密度として捉えることによって、同じイメージを展開できる。

楽譜に恐れを抱いて、楽譜に捉われない授業を工夫するよりも、カラー版のイメージ譜(図形譜)から本来の楽譜へ移行し、楽譜を見ながら鑑賞することによって、イメージ譜(図形譜)で感じたものより、より具体的な疑問も生まれてくる可能性は高いのではないだろうか。

イメージ譜(図形譜)を楽譜と同期させ、楽譜のどの部分に注目するか「道しるべ」を明示することによって、次第に楽譜に表現されている音符や記号や意味が読み取れるように仕組んでいくことが、自立した音楽鑑賞への近道であるはずだ。

前出の指導案でも、登場人物の音形や音域の違い、伴奏譜の背景の移り変わりの変化等、楽譜から読み取れる言語の意味や記号の意味によって、想像から創造への転換点が生み出せ



るのではないか。筆者は西洋音楽史の授業内で様々な様式の音楽を聴くときに全て楽譜を用いたところ、学生の反応はこれまで気づかなかったバロック音楽での強弱表記のなさや、ポリフォニーで作曲された楽譜とホモフォニーで作曲された楽譜の音符の密度、楽器の重なりや和弦への新たな興味を持ち始めていたことに、これまで楽譜を使用していなかった時の着眼とは違う反応だったことに非常に興味を持つ結果となった。また、15 週ある授業の半分を経過した頃から、少しずつ音楽進行と合わせて総譜を読むことができるようになったことも変化の表れと感じている。今後、具体的なデータを取ってこの効果を解明していきたい。

## 6. 比較音楽論的観点による音楽の批判的評価方法の導入

これまで鑑賞の授業における楽譜の読譜の必要性について述べてきたが、ここでは、同じ楽曲であっても演奏者が違うと表現が全く違うものになるという可能性を知ることも鑑賞授業の重要な部分であることを述べていく。

1 の項で述べた耳の特性には、もう一つの性質がある。それは、出会った音楽が好きになるとときには多分に演奏者の表現（演出）が影響するということである。

同じ楽曲の演奏を、演奏者を違えて聴く時、聴き手は最初に出会った音楽の演奏と比較して聴く傾向が強い。知らないうちに比較しているのである。比較して良いものを選択する力は、多様な楽曲を聴くことも重要であるが、一つの楽曲の中で複数の演奏を聴くことも大切なのである。その時、楽譜の読譜は第二の重要性を帯びてくる。

曲の演奏の違いを理解するには、ガイドとなる楽譜があるからこそ、どの部分がどのように違うという明確な答えが得られるからである。その違いが明確に理解できたことで、演奏の良し悪しも明確にすることができるのである。

このように鑑賞において初期の段階から導入することは、作曲家の意図を読み取るだけでなく、演奏の評価を行う力も育むことができるのである。

## 7. おわりに

AI（人工知能）の能力がますます人間に近づく中であって、人の創造力を育成する必要性が高まる中、直感的能力ではなく、理論に裏付けされた分析力と創造力を養うためにも、楽譜の読譜は重要である。また、音のない世界から音楽を創造することができるのも楽譜の特性であり、読譜はこれを達成する能力である。

更に、3 項で挙げたゲーテ詩「魔王」には、レーヴェやシュポアといった作曲家たちも作曲しており、楽譜があれば演奏を聴くだけで比較する印象よりも深く違いを意識できることになるであろうことを付け加えておく。

## 参考文献

1. 『胎児の記憶と学習の可能性に関する研究』 児玉典子著 文部省科学研究費補助金研究成果報告書（1988年 科研費課題番号 63510054）
2. 『胎内記憶-命の期限にトラウマが潜んでいる』 池川明著 角川 SSC 新書（2008年 7月）

鑑賞授業における音楽理解を導く読譜の役割とその効果～ 主体的音楽活動に向けての読譜の効用とは ～

- 3.文部科学省『幼児期運動指針』幼児期運動指針策定委員会(平成 24 年 3 月)
- 4.『小学校学習指導要領』文部科学省(平成 29 年 3 月告示)
- 5.『中学校学習指導要領』文部科学省(平成 29 年 3 月告示)
- 6.『おんがくのおくりもの 1 年～6 年』教育出版(平成 28 年度用)
- 7.『中学生の音楽 1、2・3 上、2・3 下』教育芸術社(平成 28 年度用)
- 8.『中学音楽 音楽のおくりもの 1、2・3 上、2・3 下』教育出版(平成 28 年度用)